

勉誠通信

Bensey Newsletter 第十八号

2010.2.16

小論・研究余滴・随想

『老子』の「道」と李卓吾

堀池 信夫

『メタデータの「現在」』

谷 口 祥 一

水を手に入れること、分けること

窪 田 順 平

『ありがとう宣言』

石 川 洋

『日本の文字文化を探る』
の出版にあたって

マリアンヌ・
シモンⅡ 及川

おでんの語源と博物誌 その二

小林祥次郎



新刊・近刊ニュース

・『ありがとう宣言』

・立松和平
全小説2 『惑いと彷徨』

・人と水Ⅰ 『水と環境』

・人と水Ⅱ 『水と生活』

・人と水Ⅲ 『水と文化』

・ネットワーク時代の図書館情報学
『メタデータの「現在」』

・『鉄幹晶子全集 第三〇巻』

小論・研究余滴・随想など本誌にお寄せ願います。

勉誠通信 バックナンバー

<http://www.bensey.co.jp/mm.html>

『老子』の「道」と李卓吾

『中国のイスラーム思想と文化』に寄せて

堀池 信夫

(筑波大学大学院人文社会科学部研究科教授)

平成二十一年の年末に勉強出版から『中国のイスラーム思想と文化』を刊行した。「中国イスラーム哲学」あるいは「中国イスラーム思想」という学問領域は、日本では今世紀になってから研究が少しずつ進みはじめたものであるが、今回、それを広く紹介しようと思画されたものである。

さて、中国イスラーム哲学とは、西洋／中東哲学と中国哲学とがぶつかりあうことによつて形成されてくるもので、明代末期から思想史に登場してくる、中国思想史全体からみると比較的新しい思想動向である。詳しくは『中国のイスラーム思想と文化』をご覧くださいと思うが、その中国イスラーム哲学成立前夜の明代中末期、中

い。ところが李贄はどうもそうではないようなのである。くだんの李贄『老子解』第一章部分、後半の三分の一ぐらいを引用する。

夫れ道^そを語りて有無に通ずるは至れるなり。然れども、象^{（現象）}に徇^{したが}う者は有に執^{とら}われ、空を蘊^{おさ}むる者は無に滞^{とどま}るなり。……有無の名は異なると雖も、有無の出るは実は同じきなるを、知らざるなり。無も亦た之を無しとすることなれば、何ぞ玄ならんや。玄はまた、玄なるものは無きとせることなれば、何ぞ「又玄」ならんや。而らば孰^たれか其の常名・常道^{（た）}為るものの自りて出る所、常無・常有の自りて名づくる所を、信ぜんや。

この文章の最後のところ、「而らば孰れか其の常名・常道為るものの自りて出る所、常無・常有の自りて名づくる

国思想史に一人のムスリム思想家があらわれた。李贄（李卓吾）という。

李贄は中国イスラーム哲学者ではなく、むしろ中国の伝統思想史上に位置づけられる人物であるが、しかし伝統思想の枠組からは、かなりとつぱずれた思想傾向の持ち主であった。そのとつぱずれは、あるいは彼がムスリムだったせいかもしれないのだが、しかし彼の著述は漢文でなされ、その思想的格闘も中国伝統文化のイデオロムの中でおこなわれているため、そこからイスラーム的傾向というものを抽出するのは非常に難しい。

そうした中であつて今回、『中国のイスラーム思想と文化』に青木隆氏が「李贄——思想言語を獲得したムスリ

る所を、信ぜんや」からは、李贄が「常道」や「常無」「常名」などの根源的概念の、さらにその根源となるものの思索に至り、そしてそれについては否定的に見ていることが明確に見てとれる。じつは、李贄はこの文の前後において、ふつう肯定・尊重されるところの「道」や「名」は否定さるべきであるとしたうえで、それらよりも高次である「常道」や「常名」などを肯定的に評価している。であるのなら、その

かぎりでは李贄の老子解釈は中国の伝統上にあるといえるのだが、しかし彼はその上に立つて、さらにそれら「常道」などのさらなる根源となるものは（中国伝統的理解・論理のもとでは）信じられるものではない、としている。中国的伝統の一定の部分は肯定しつつも、より根源的思索段階になると否定的にみているのである。とはいえ、それでは李贄は、否定されるものとは異なる、新たななんらかの存在あるいは概念の

ム知識人の先駆」という論文を執筆し、李贄の家系・李贄の遺書（埋葬法指示）の分析・彼の夫婦中心思想（中国伝統の父子中心思想（孝）へのアンチテーゼである）などにもとづいて、ムスリムとしての李贄の姿を、新しく描き出した。そこでこの小文では、青木氏の驥尾に付しつつ、氏の切り口をほんのちよつとだけ広げる試みをおこないたい。紙数がかぎられているので、とりあげるのは『老子』第一章「道の道とすべきは常道にあらず」への李贄の解釈（『老子解』の、ほんの一部分である）。

『老子』において「道」や「無」という概念が根本的に重要なものであるのはいうまでもない。歴史的には、その解釈・概念規定内容などはすこぶる多様だったといえるが、しかしそれは存在論的に、あるいは当為論的に根底となるものとされ、老子思想における至上のものと定位されてきたのは、基本的に共通した事態だったといつてよ

ごときものについて、何かを提示しているのかというと、明示的には語っていない（これは、もはや「常道」などより以上のものはない、としているとも見られる）。ただそうであつても、このような徹底的な思索のゆえに、李贄は中国的伝統において、その突破者、ブレークスルーをなしつつあるものとは評価される。近代になつて、李贄思想の評価が急速に高まったのも、理由はあるわけである。

ところで、李贄より五歳ほど年長であるが、中国においてムスリム知識人教育システムを開創した陝西の胡登洲は、「宋時の諸先生の言」は泥土の美人（被造者のこと）の厚化粧みたいなものばかりで、「性理を見るに及んでは、これを晒^わ」つたと、朱子学的性理思想を軽侮していた（『經学系伝譜』）。また李贄より半世紀後にあらわれる最初の中国イスラーム哲学者王岱輿は、朱子学の「太極」「一本万殊」、『老子』の「無

メーメルマガジンの登録申し込み・取り消しはこちら

名」、仏教の「万法帰一」などの伝統的な根源概念に一定の評価をあたえつつも、しかしそれらは真の根源である「真^{アラ}」の下位に定位するもので、二次的ないし相対的な根源であるとしていた（『正教真詮』「真一」）。

こうした李贄とほぼ同時代の中国イスラームの知的環境を背景におくと、彼の『老子』解釈、そして「常道」よりもさらに根源的概念への思索には、そうした背景が反映していた可能性はかなりあったのではないかとも思われる（もちろん『老子解』全体をさらに緻密に検討しなければならないのだが）。李贄の著述・思想の分析研究は、今後はこうした側面からも進められなければならないであろう、と思う。



[⇒ 目次に戻る](#)

『メタデータの「現在」』——未掲載の「あとがき」

谷口 祥一

（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科教授）

拙著『メタデータの「現在」…情報組織化の新たな展開』が、このたび刊行の運びとなった。情報資源が急速に拡大し多様化している現在、その組織化がこれまでも増して重要性をもっており、本書はメタデータを用いた情報組織化の「現在^{いま}」を取り上げた。本書には「あとがき」を付していないため、ここに「あとがき」を記してみた。

情報組織化とメタデータ

組織化とは、情報資源への到達を効率的・効果的に実現できるように支援する仕組みを指す。最も身近な組織化とは、手元の図書がある規則性をもつて並べる、文書をフォルダーに綴じ込むなどであった。これらはいずれも排

アジア遊学129号

中国のイスラーム思想と文化

堀池信夫 企画

A5判並製・定価二〇〇円（税込）

唐代以来の東西交流の中に伝播し、独自の展開を遂げた中国イスラーム思想。

文化的に特筆すべき影響をもたらしながらも、これまで省みられることのなかった文化交渉史の一面を明らかにする。

『中国のイスラーム思想と文化』序説／堀池信夫

中国ムスリム・コミュニティの形成と多様性／黒岩 高

イスラームと儒教の距離／佐藤 実

李贄―思想言語を獲得したムスリム知識人の先駆／青木 隆

中国思想とイスラ／仁子寿晴

元朝期東アジアのスーフィズム／矢島洋一

アラビア語と漢語がむすぶ中国ムスリム像／中西竜也

靈明堂における宗教教義の思想的系譜／王 健新

中華民国期における「中国イスラーム新文化運動」の思想と構造／安藤潤一郎

「満洲国」のムスリム／田島大輔

虐殺を逃れ、ミャンマーに生きる雲南ムスリムたち／木村 自

消えゆく北京のムスリム・コミュニティ

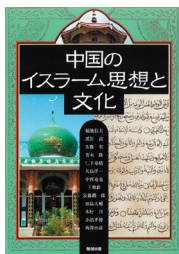
トルコ系ムスリム居住区「回子宮」の二五〇年／小沼孝博

都市の再開発と回族コミュニティの変貌／西澤治彦

◎連載

天理参考館の中国玩具資料 最終回／中尾徳仁

続 本朝文料抄 最終回／後藤昭雄



データ、記録史料データなど、それぞれの領域ごとに名称が異なっていた。本書は、このメタデータに焦点を当て、どのような状況にあり、どんな課題を抱え、そしてどのような新たな試みがあるのかなど、その「現在」を浮かび上がらせようとした筆者の試みである。メタデータの世界も多岐にわたるため、社会的機関として図書を始めるための刊行物の組織化を伝統的に担ってきた図書館とその近接する範囲でのトピックを取り上げた。

メタデータの「未来」

本書では、前述の通り、メタデータの「現在」を描くことに注力した。メタデータを巡るトピックや試みは多岐にわたり、単一の方法にすべての（多くの）動きが同調しているわけではなく、どれを取り上げるべきか迷いも多かった。書き終わった今でも、正直なところ迷いが完全に払拭されたわけ

小論・研究余瀾・随想など本誌にお寄せ願います。詳細については「投稿募集」をご覧ください。

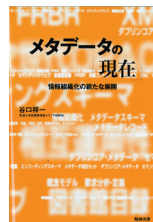
メタデータの「現在」

情報組織化の新たな展開

谷口祥一 著

四六判並製・定価一七八五円（税込）

個人や機関によるメタデータの作成は増加しているが、その標準化や協力・連携は未だ十分とはいえない。メタデータの設計から作成、提供までの流れを具体的に示し、デジタル／非デジタル資源を問わず、情報資源の組織化に向けたメタデータの「現在」を描く。



はじめに
第1章 メタデータとは
第2章 メタデータのワークフロー
第3章 デプリンコア・メタデータ
第4章 メタデータとセマンティック・ウェブ
第5章 図書館目録のメタデータ
索引

利用者志向の
レファレンスサービス
その原理と方法
齋藤泰則 著
四六判並製
定価二〇〇円（税込）

図書館はコミュニティ
創出の「場」
会員制ライブラリーの挑戦
小林麻実 著
四六判並製
定価二〇〇円（税込）

はない。メタデータの「現在」を描く
試みとしての程度成功したかは、読
者の判断に委ねたい。

他方、メタデータの「未来」を本書
が明確に描写できているわけでもな
い。未来に通じる主要な芽は取り上げ
たつもりではあるが、未来は必ずしも
現在の延長線上にあるとは限らないの
が、世の常である。むしろ、不連続の
飛躍が未来の姿を決めることも多い。
ただ一つ確信をもっていることは、
メタデータを組み入れた組織化の重
要性は確実に増加するということであ

る。サーチエンジンもメタデータを活
用する方策を常日頃からうかがってい
る。

未来のメタデータの姿がどのような
ものかは、領域や活用法（アプリケーション）
に依存する部分も大きい。たとえ
ば、図書館が作成する目録というメタ
データに焦点を当てたとき、①セマン
ティックウェブという方向性とはどの
ような関係を切り結ぶのか、②人手に
より作成される部分と機械的に（ソフ
トウェアにより）作成される部分とがど
のように分担され組み合わせられるの

か、③他領域のメタデータや管理メタ
データなど他の目的のメタデータとど
のような関係に置かれるべきなのか、
といった問いとなる。それぞれの問い
について考える材料は本書において示
したつもりであるが、踏み込んだ議論
を展開する余裕と余力は現在の筆者に
はなかった。今後、多少とも時間をとつ
て、あらためて考えてみたいと思つて
いる。



⇒ 目次に戻る

水を手に入れること、分けること

窪田 順平

（総合地球環境学研究所准教授）

多すぎる水、少なすぎる水

人間にとって水とはやっかいなもの
である。なくてはならないものではあ
るが、多すぎたり少なすぎてもうまく
いかない。日本に一年間に降る雨の量
（降水量）は約一七〇〇ミリメートルで、
世界平均の約二倍近い量がある。とこ
ろが、降水量を人口で割った一人あた
りの量で比べると、狭い国土に多くの
人間が暮らす日本は、世界平均を大き
く下回るといふ。それでも、中国の内
モンゴル自治区、新疆ウイグル自治
区、そのとなりのカザフスタンなど中
央アジア諸国、さらにはサウジアラビ
アなど、広大な砂漠や草原で調査を続
けていると、緑豊かな日本は、やはり
恵まれた地域であると感じる。

最近では地球温暖化の影響か、異常
な豪雨が増えている。古来より「水を
制する者は天下を制する」といわれた
ように、日本の歴史を思い起こしてみ
ても、治水事業は為政者の力量をはか
るものさしのひとつであったし、「多
すぎる水」が常に大きな課題であつた。
一方で、水に恵まれた日本といえど
も、水はどこでも容易に手に入ったわ
けではない。授業や講演会のはじめに、
「農業、工業、家庭用水のどれが最も
多くの水を使っていますか」と聞くと、
「工業」か「家庭用水」と答える方が
多い。意外に知られていないが、日本
において利用可能な水の約七割が「農
業」に使われている。世界的にみても
この数字はほとんど変わらない。量で

みれば人間の使う水の多くは、農業で
使われている。人間にとって必要不可
欠な食料を作り出す「農」という営み
にとつて、水をどう手に入れ、どのよ
うに分配するかは、地域を問わず、い
つの時代でも切実な問題であつた。

田筒分水

阿蘇外輪山の南麓、熊本県上益城郡
山都町の五老ヶ滝川に架けられた通潤
橋は、地形的に水源に乏しい白糸台地
に水を送るために造られた、石組みに
よる農業用水の水路橋である。大変美
しいアーチ式の水路橋として知られ、
江戸時代に造られた石橋としては最大
のものと言われる。また、兩岸の台地
よりも低い位置に架けられた水路橋に
水を通す、逆サイホンという当時とし
ては最新の技術が使われている。熊本
城築城以来培われた肥後の石工達の確
かな技術が感じられる。

通潤橋を通る水は、上流の笹原川に

「メーラマガジンの登録申し込み・取り消しはこちらから」
ある取り入れ口から導かれるが、すべてが通潤橋に送られるわけではなく、いくつかの水路に分水されている。この分水施設は、「円筒分水」あるいは「円形分水」と呼ばれる構造を持っている。



通潤橋への分水を行う笹原川沿いの円形分水工。仕切りで三二七〇度…一（九〇度）に分けられ、「三」が通潤橋へ送られる。
本人撮影 二〇〇九年八月

取り入れ口から水路で運ばれた水を、トンネルによって円筒の中心部の下から湧き出すように導き、水が円筒の外縁を越えて流れ落ちる際に、外縁に設けた仕切りで分配する。豊富な降水量があるとはいえ、時期によっては多量の水が必要な水田耕作を行う日本では、昔から水をめぐる争いが絶えなかった。水路の水を常に一定の割合に分水することは、一見簡単なように思えるが、難しい技術のひとつで、実は長く懸案であった。円筒分水は、大正時代に考案され、日本各地で造られた。仕切りの間隔によって、水を分ける割合が直感的に理解でき、水争いの解決にとつてもっとも重要な「誰にでも公平さが実感できること」が体现されており、それが様式的な美しさとなっている。

通潤橋のような水路橋や円筒分水などを見るにつけ、その美しさの背後に、日本という水に恵まれた地域であつて

も、農業という人の生存を支える営みにとつて、必要な水をどのように確保し、どのように分配するかがいかに困難であつたかが窺い知れる。

中国の水問題

私が最近調査を行っていた中国甘肅省の黒河という流域は、年間の降水量が一五〇ミリメートル程度、日本の約十分の一というところで、古くから灌漑による農業が営まれてきた。もとより灌漑を行わなければ作物は育たない。まさしく「少なすぎる水」である。ここでの水の貴重さは、なかなか日本人に理解できるものではない。近年灌漑農業の進展によって下流の湖が干上がるという環境問題が起きたという、いかにも農業で水を浪費したかのような印象を持たれるかも知れないが、この地域での水の分配は、きわめて厳格に行われている。それぞれの農地に水路から水を引き込んで灌漑が行

われるが、時間を定めて分配する。夜中でも水利局の役人と農民本人が見守る中で、定められた時間だけ、水を農地に引き込むことが行われる。少しでも長い時間、水を農地に引き入れたいと必死な農民達の姿を見ていると、「ここで水を使ってしまうと下流の湖は干上がってしまうよ」とはなかなか口に出せない。農民達に取ってみれば、下流の湖と彼らの生活とどちらが大事なのだと言いたいであろう。水はいったい誰のものなのか、実に難しい問題である。



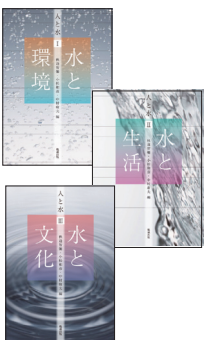
人と水 全3巻

秋道智彌・小松和彦・中村康夫 編
四六判上製
各巻定価三二五〇円（税込）

I 水と環境

今、最も大切な自然環境について考える。水は単なるH₂Oではなく、歴史的、文化的、地域的な文脈に深く埋め込まれた存在である。水に恵まれた日本社会が、文化から環境までを視野に入れて今後何をなすべきか。

総論 超媒介物としての水
第1部 水と地球・地域
第2部 水とコモンズ
第3部 水の管理と政治



詳しいパンフレットがご用意です。
ご入り用の方は、弊社までご連絡ください。

II 水と生活

水がもつ様々な意味を多角的に追求する。恩恵、権利、聖性、破壊、紛争……。
水の持つ様々な意味を日本の認知を結果として追求する。日本人が歴史の中で育んできた水の文化と技術は、貴重な世界共有の財産となり、世界の水問題解決に貢献していく。

総論 水と生活
第1部 景観を楽しむ
第2部 利水の闘い
第3部 生業を考える

III 水と文化

多彩な領域を統合する「統合的な知」の構築。「水」と人の関わりをテーマに、自然のみならず、文化、社会、思想、文学、美術にまで視野を広げ、学際的な達成を世に問う。縦横無尽にそしてしなやかに、読む人の思考をワープさせる複合的な知の構体。

総論 水をめぐる
文化誌へ向けての試み
第1部 水と芸術
第2部 水と聖性
第3部 水と文化

『ありがとう宣言』

石川 洋

(托鉢者)

八十歳を迎える半年前、雨の日であつたが、病院の帰り、自宅の石段で足をすべらし、横転し、しばらく立ち上がる事が出来なかつた。幸いに骨を折つたのではなく、半月盤がずれて出血でとどまつた。歩行が困難になつたが入院する程でなかつた。

ところが半月後、京都のビルのエスカレーターで横転して動けなくなつた。不注意としかいいようがないが、これも護られて右肩の打撲で事なきを得た。ただ手を挙げる事が出来なかつたが、講演にご迷惑をかけることはなかつた。しかし、続いたけがで、けがそのことよりも、もつと深いところで立ち直る力を養わなければならな

いと痛感させられた。

さる時も、くそする時も、「治して下さつてありがとうございます」と唱える。空気も水も太陽も、みんな生かそうとしている。われわれは生かされるようになっているのだから「ありがとう」とお礼を言わなければならない。と書いてあつた。

早速、大声で仏様の前で「治して下さつてありがとうございます」と一時間唱えてみた。すると本当に大転換が始まつた。勿論、折れた骨が、元どおりに治るわけではない。しかし、先ず、お礼が出て来た。「左手であつてよかった。右手であつたらどんなに大変だつたらう」と大感謝がこみ上げてきたのである。

次に足の指を三力所折つたら、歩くことが出来なかつただらう。「足でなくて手であつてありがとう」と心からお礼を申し上げた。また、顔であつて包帯でぐるぐる巻きにしていたら、人さまにいらぬ心配をおかけする。そし

「百尺竿頭一步を進む」という禅語がある。私にとつては、百尺ではなく八十尺であろうが、腹の底から、一步を進む、もう一つの目覚めがほしかつた。八十歳から始めるエネルギーがほしかつた。

そんな自己との対面の中で、三十数年前の記憶が光りとなって蘇つた。

それはカンボジアがまだ動乱のさ中にある時であつた。WCRP(世界宗教者平和会議)の役員として、カンボジア国境に避難している難民の救済に

出発する一カ月前のことである。私の不注意で石畳に横転して左手の指を三本折つてしまつたのである。医者にみて頂くと出発の前までにはギブスはずしてれると言つて、治療をしてくれ

て、家でけがをしなくてよかつた。外の皆さんにご迷惑をかけることになる。次々、お礼がふえてくるのである。そして最後に「女房でなくてよかつた」「私であつてありがとう」と心底からお礼がこみ上げ苦笑してしまつた。

そのようにお礼を言っていると、けがの痛さを忘れ、けがをしたことが喜びに変わってくるのである。又、一カ月で治るだらうかという焦りの気持ち

がなくなり、私は「丸田翁のおじさんありがとう」とお礼を申し上げた。

それよりもうれしかったのは、カンボジアの難民には、足や手を失つた人、眼を失つた人、生死の境い目で苦しんでいる人が沢山おられるのである。このままの実体で支援にいくことが、もつともふさわしいのではないかと、心に落ちるものがあつた。

今でもカンボジアの支援をつづけ、学校だけでも四十五校建てさせて頂いているが、話を聞きますと、カンボ

た。言われた通り、一カ月後に医者に行くと、ギブスははずして頂いたが、指は冷たく動かなかつた。医者に「動かないですよ」と言うと、「私はギブスをはずしてあげるとは言つたが、指が動くとは言つていない」と言われた。どうしたらよいのか、思案のつかないままに家に帰つて来た。

入口の障子を明けると、『丸田翁の健康法の話』というパンフレットが置いてあつた。私の現状を知つて丸田翁がもつて来て下さつたのか、誰かがおいていつて下さつたのかはわからないが、本を開いてみた。

そのパンフレットが一番大切なところは、「治して下さい」とお願いをしてはならない。「治して下さいであ

りがとうございます」と、大声で一時間言つてみると、必ず大転換が始まつてくる、必ずよくなる、運命も変わる、と言ふことであつた。

ごはんを食べる時も、寝る時も、起

ジアのリーダーが、手をけがして山をよじ登つてきた私を見て、この人を信じようとしたのだと語つてくれた。「けがをさせていただいてありがとうございました」と、改めてお礼を申し上げた。

このすがすがしい、次元を超えた大きな「ありがとう」に包まれ、感謝の手を合わせている時「ハッとした」。長い間、曲がらないでいた左手の三本の指の二本が動き出していたのである。もう一本の指も曲がりかけているではないか。

又、それより以前から、足の両膝が充分に曲がらず、坐ることが出来ず、随分と不自由をして来たのである。試しに膝を曲げてみると、すーっと、なんの痛みもなしに曲がつたのである。充分ではないが、考えられない変化が現れたのである。

それらしい表現は出来ないが、現実

人間愛叢書

ありがとう宣言

石川洋 著
四六判上製 定価一八九〇円（税込）

いのちの真実と愛に目覚め、感謝の生涯を捧げる感動の物語。
市井の托鉢者・石川洋の記した人生の出会いと感謝
障害者やカンボジアの難民たちとの触れあい、
人生を変えた師たちとの出会い。
無事の聖尼・大石順教尼、マザーテレサ、坂村貞民
などから学んだ「生きる」ということ。
人生において究極に大切なものは、
「こめんなさい」と「ありがとう」である。

人間愛叢書

生命讃歌 お伽噺

石川洋 著
四六判並製 定価一八九〇円（税込）

したきり雀、浦島太郎、かぐや姫…
我々が親しんできたお伽噺には「生きる力」
が描かれていた。素朴でたくましい庶民の
信条をさらけだしながら、人間生活の希望を
語りかけるお伽噺
それは、現代を生きる我々の救いともなる。

の変化が「ありがとうのあかし」となっているのである。

ありがとうといえ

ありがとうが見えてくる

ありがとうが見えてくれば

ありがとうがあらわれる

今、大地に伏して礼を申し上げ、この
新しき体をどう生かすかをおたずねし、
老いから捧げる、終わりなきいのちを捧
げることをおうかがい申し上げた。

八十歳を前にして「百尺竿頭一歩
を進む」は、私のような下根のもの

は、百尺から一歩を上がるのではなく、
大地に降りて、多くの人の末尾に伏し
て下坐奉仕の一行に徹することである
と、あふれる涙の中でお誓いを申し
上げた。
有難いことに、高齢になられた師・
天香さんが、縁のある方の足を洗われ
た故事を思い出し、今、身にふざわし
い下坐行として、「洗足願行一万人成就」
の誓願を立て実行させて頂いている。
一萬人とは、生まれ変わり、生まれ
変わって、行じつづける願いである。
老いの発願とは、今、何をしている
かでなく、次の世代に何を願いつづけ



（『ありがとう宣言』より抜粋）

⇒ 目次に戻る

『日本の文字文化を探る』の出版にあたって

マリアンヌ・シモンⅡ及川

（東京大学准教授）

はじめに

一九九九年、日本の文字・出版文化
を研究する四人のフランス人が東京に
集まった。それぞれ研究の対象・時代
も様々で、もの見方も異なっていた
が、せっかく同じ東京にいるのだから
四人の力をあわせて研究しようとい
うことになった。うまくいけば文殊の知
恵が得られるかもしれないと思った。

数名の日本人研究者の協力を得て、
日仏交流の柱である日仏会館で数度
にわたって研究会を開催し、その研究
成果として、二〇〇六年にフランスで
『Du pinceau à la typographie. Regards
japonais sur l'écriture et le livre』(EHEC)

が出版された。このたび、それを元に
内容を多少増補した形で、日本語版『日
小論・研究余瀟・随想など本誌にお寄せ願います。詳細については「投稿募集」をご覧ください。」

本の文字文化を探る——日仏の視点か
ら』を出すことになった。

本書は、歴史的にもテーマの種類
においても広範な領域を網羅する書
物である。世界最古の木版印刷物であ
る百万塔陀羅尼から、近代的な印刷技
術や書物の誕生を経て、インターネッ
ト時代における漢字情報処理の問題に
至るこの書は、書道文化とそれに関わ
る用語、整版印刷から活版印刷への移
行、テキストの図像化、さらには印刷
物の流通、また近現代における活字書
体の変遷と漢字の電子処理、漢字政策
に関わる重要な問題までを取り上げて
いる。

十三本の論文が収録され、テーマ
別に三章（毛筆から活字へ、「テキストの

図像化」、「本の流通と形態の変遷」に分か
れている。それぞれの論文が幾つかの
問題点を細かく論じているが、また本
書の全体を通してさまざまな角度から
論じられている問題も多い。一つの作
品を理解するには多くの問題点を意識
し、さまざまな知識が必要であること
が分かる。

毛筆から活字へ

たとえば、私が研究している文字
絵もそうであるが、その定義と使用の
変貌には多くの問題がある。「文字絵」
という言葉の起源と使用を確認してみ
ると、積極的に使い始められた江戸時
代の意味（文字で以つてものの形を描いた
もの）と現在の意味（絵文字、ロゴグラム
などという意味で使われる場合が多い）は多
少異なり、文字絵と意識されていない
ものでも立派な文字絵であることが分
かる。たとえば北斎の絵手本には、文
字絵でありながら『略画早指南』と題

されただけの文字絵本もある。

しかし、ある意味では文字絵の歴史は日本の文字の歴史を語るといえる。毛筆から生まれた文字絵は、筆の自由な動きを必要としたものだったが、文字が活字に変わるとともに急速に消えてしまった。それがコンピュータグラフィックスの発達により、最近再びグラフィックデザインなどに使われている。白隠禅師の文字絵の「天神」から街角のうなぎ屋の看板で使われる「うなぎ」の「う」までのスパンを見ると、三〇〇年以上の伝統とその変貌が分かるのである。

テキストの図像化

テキストでもあり、絵でもある文字絵はまさに「テキストを図像化」したものであるといえよう。絵師の北斎、広重を筆頭に、国芳や河鍋曉斎などに描かれた作品もあれば、書にも画にもかかわる禅僧や山東京伝なども制

作し、戯作者の十返舎一九の文字絵も確認されている。

ヨーロッパの文字遊びとの比較は興味深い。遠いギリシアの昔から、文字で絵を描いた例は少なくない。ラブレの『ガルガンチュア物語』にも文字で描いた酒瓶が出てくる。しかし、これらの作例は数が限られており、一般人の遊びにはならなかったことがわかる。それと異なり、日本では十九世紀を通じて多量に刷られた錦絵「金のなる木」は、あまりにも一般的であつたために、その「木」自体が文字で描かれている不思議さに疑問を持つ人は少なかつただろう。芸術性という観点から絵画を評価する現代の歴史観では見落とされがちだが、江戸の庶民芸術、現代で言う大衆芸術、装飾芸術という観点で見れば、江戸の芸術性の一面として、このような遊びの芸術も人気を博したのである。

だが、明治時代に入ると「教育文字絵」というのが突然現れたりした。これはそれまでは遊びとされていた「へのへのもへじ」と並んで、北斎の絵師向けの手本から借りたモチーフを適当に省略してまとめた、子供の文字教育を目的とした文字絵集である。

文字絵の面白さに取り付かれて十数年経つが、大英博物館で見たこと

終わりに

十年前の研究会に集った四人は、パ

本の流通と形態の変遷

文字絵は本の流通と形態の変遷にも関わるものである。江戸時代は、文字を読めるようになった人々が急速的に増え、出版文化も発展したと知られているが、印刷物にかかわる仕事を調べてみると、現在に至つてもよく知られている有名な作家、絵師、版元、彫師などの他に、無名な作者や職人も大変多い。文字絵の場合では、名のある作者もいれば、文字絵集の最古とされる『文字あつくし』（二六八五）の作者の園果亭義栗のように、情報がほとんどないものもある。

しかし、作者不明でも、文字絵の姿からはその時代の読者の姿や生活が見えてくる。たとえば、伝統的なモチーフの群が固定した上で、読者の趣味と要求に合わせて新しい作品が生まれるということもあった。宗教、和歌や書道などの世界で使われていた文字絵は、もつぱら退屈しのぎの遊びであつ

りと東京に分かれてはいるが、その後も継続して日本の文字文化の研究が続いている。これまで余り注目されなかつた分野の研究で、フランス語版と日本語版とが出されたことは、今後、さらに同じような問題意識を持った仲間を増やす契機となるだろう。次の研究のためのステップとなることが期待される。



日本の文字文化を探る

日仏の視点から

クリストフ・マルケ／マリアンヌ・シモンⅡ及川
クレール碧子・ブリッセ／パスカル・グリオーレ
A5判上製・定価八四〇〇円（税込） 共編

世界最古の木版印刷時代の漢字情報処理まで インターネット時代の漢字情報処理まで

書道文化、整版印刷から活字印刷への移行、
テキストの図像化、書籍の流通、近現代の
活字書体の変遷と漢字の電子処理、漢字政策など、
日本の文字文化・出版文化に関わる重要な問題を
多角的な視点から探る。

序 クリストフ・マルケ

第一章 毛筆から活字へ

書の世界／名兎耶明 碧眼の『日葡辞書』が見た日本の書道文化／安藤隆弘
仮名の「散らし書き」の性質をめぐって／パスカル・グリオーレ
天平の木版印刷から明治の木村嘉平まで／近藤高史
十九世紀ヨーロッパ・中国での明朝体活字の開発と日本への伝播／小宮山博史
エレキテルの時代／パスカル・グリオーレ
戦後の漢字政策の構図と文字コードの迷路／家辺勝文

第二章 テキストの図像化

院政時代における宗教的・詩的クリフトグラフィ／クレール碧子・ブリッセ
筆描と刻線の接近／小林宏光 絵入り版本『義経記』の挿絵をめぐって／出口久徳

江戸時代活字の文字遊び／稲垣進一
葛飾北斎と文字絵の世界／マリアンヌ・シモンⅡ及川
河鍋曉斎の絵本／及川 茂

第三章 本の流通と形態の変遷

江戸時代の書籍流通／鈴木俊幸
明治期の印刷と出版／岩切信一郎
編集後記／編者を代表して パスカル・グリオーレ



おでんの語源と博物誌 その二

小林祥次郎

○はんぺん

ハンペンは江戸時代にはハンペイとするものも多い。「鰻餅」と書いたものもある(『料理綱目調味抄』(二)1730など)。「鰻」はウナギだが、ここでは鰻を指すようだ。ハモを原料とする餅のようなもの、というつもりか。『嬉遊笑覧』(飲食では「ハモをよしとすれば海鰻餅か」と、これを語源としている。

『守貞謾稿』(食類)には、碗の蓋などを使って作る、蓋半分に魚肉を量って、半円形なので半平と言う、江戸の半平は半月と方形の二種があり、半月を半月と言う、昔は半月が多かったが、近年は四角なものばかりだ、とある。ヘイというのは平らだからだろうか。

大槻文彦『言海』は、「半平」は「駿

んで湯で煮る、とある。

○がんもどき・ヒリヨウズ

ガンモドキについては『言海』に次のように記してある。

「鴈ノ肉ニ擬キタル意」食物ノ名、古製ニイフハ、麩ヲ製シテ油ニテアゲタルモノ。今ハ、牛蒡、にんじん。あさのみナド刻ミテ、豆腐ニ交ヘ、油ニテアゲタルモノヲモイフ。

雁の肉に似せたもので雁擬きと言うのだろうと想像はついていたが、もとは麩の油揚げであるとは知らなかった。そのほうが雁の肉に似ているのかもしれない。享保十二年(一七二七)成立の辞書『志不可起』に、「今料理ニ雁もどき・兎もどき・狸もどきナド云フハ、本ノ物ヨリ増シタリト戻ノ義カ」とある。兎もどき・狸もどき(後に引く『それぞれ草』には「鳥もどき」がある)

府ノ厨人、創製者ノ名ニ起ル」として、「はんぺん」は東京での訛りとする。

荒川惣兵衛『角川外来語辞典』は、中国語の方餅 fang-pin とする。

以上の諸説の中では『守貞謾稿』の説がもつともらしく感じられるが、どうだろうか。

はんぺんの作り方が、延宝二年(一六七四)に出た『古今料理集』(六)に出ている。蒲鉾のようにして「蒲鉾」のところに、魚を三枚におろし、たたいて搗りつぶすとある、山の芋をおろして三分の一加え、搗りまぜる、やわらかにするには芋を過ぐす、ふつくらとしたい時には玉子を少し加える、とある。現在のものと同じようだが、次に「蒸しはんぺん」の製法が出ているから

これは蒸したのではなく、焼きでもしたのである。

晩鐘成の『兼葭堂雑録』(四)には、板に付けた蒲鉾を、京都では半平と言うとある。

室町時代の辞典の『文明本節用集』に「白璧(豆腐異名…)半瓣(同)」、『天正十八年本節用集』に「半辨(豆腐)」とある。豆腐をハンペンと言ったようだ。また『日葡辞書』には「Farben(ハンペン)豆腐を多つた後、それを味噌で煮た一種の料理」とある。これは田楽に似たものようだ。これらは魚肉のハンペンと関わるのだろうか。元禄二年(一六八九)に出た『合類日用料理抄』(四)に、ハンペンは山の芋・豆腐・魚を原料とする。豆腐も関わっているのかもしれない。天明二年(一七八二)に出た『豆腐百珍』に、「ハンペン豆腐」というものがあり、製法は、長芋をよく搗り、豆腐の水を絞る、等分に搗り混ぜて丸くして美濃紙に包

などと、鳥獣に似た食品を考えたのは、肉食を禁じられた僧侶などではなからうか。元禄七年(一六九四)に出た句集『俳諧うたたね』に、「僧の喰ふ名に罪抜けぬ雁もどき」、元禄十六年に出た句集『俳諧広原海』(二五)に、「雁もどき骨に破戒の音のあり」という句があるのは、それを物語っているだろう。享保四年(一七一九)に出た芭蕉の門人の乙州の著の『それぞれ草』(中)に、「ここにいづれの寺の好みそめけん、精進の料理に、あるいは卵豆腐、あるいは鳥もどき、あるいは雉子焼き、あるいは狸汁とて、いろいろ名付けて楽しむは、機嫌戒を保つかと、ひとしほ哀れにはべるなり」とある。今でも寺で作る精進料理に、海苔などを細工して鰻の蒲焼に似せたものを作るのと同じ考えではないだろうか。

関西では、ガンモドキをヒリヨウズ(飛龍頭)・ヒリユウズ・ヒロウスなどと言う。これはポルトガル語 filhós か

らと言う。filhós というのは、filho の複数形で、filhos de natal (クリスマスの子リヨース)とも言い、クリスマスに家庭で作る菓子で、小麦粉を卵で溶いてこね、蒸留酒などを加えてイーストで発酵させ、丸くちぎって油で揚げ、シナモン、砂糖をまぶした揚げ菓子のことだ。穴の無いドーナツのようなものか。多くの辞典で filhós としているが、これは息子の意の filho の複数形だから、正確ではない(ポルトガル語については、寺崎英樹氏のお教えを得た)。

元禄二年の『合類日用料理抄』(二)に、ひりようすは麦の粉か米の粉に卵の黄身をまぜて油で揚げるとある。蘭学者の森島中良が『紅毛雑話』(二)に、飛龍頭(ひりうづ)はポルトガル語だそうで、粳米(うるち)と糯米(もちめ)を水で練り合わせて茹で上げて、油揚げにしたものと記している。これらなら、材料は日本ふうな米粉になっ

「メルマガジンの登録申し込み・取り消しはこちら」

で、fillosに近く。

元禄七年の『和漢精進料理抄』には、豆腐に牛蒡・木耳を切り、麻の実を入れて、葛を粉にしてよく交ぜ、梘の油で揚げる、と、現在のに近いものが出ている。

享保二年（一七二七）に出た横島昭武『飛龍子（田菜之製）』とある。このころの田菜は豆腐のもののだろうから、揚げたものを焼くこともあったのか。

あるいは、ガンモドキとヒリヨウズとはもともとは別の物だったのが、いつからかいっしょになってしまったのではないか。

〇つみれ・つくね

薩摩揚げの材料を油で揚げないで煮たものがツミレだ。これは「摘み入れ」のつまつたものの、「摘む」は指や爪の先でつまみ切ること、「入れ」は茹でるために湯に入れることだ。寛文

之聞書』には、「かまぼこのしべ長さ五寸（一五センチ）、先の広さ二寸、本の広さ一寸六分ばかり」とある。「しべ」は中に入れる串のことで、先が太く手元が細くなっている薄板のへらのようだ。「蒲鉾は鯨本也」と大永八年（二五二七）の『宗五大艸紙』にある。

黒川道祐の京都の地誌『雍州府志』（一六）に、鰻の肉を刀で細かく敲き、石臼で磨って塩を加え、竹の茎を芯として外に円く長く塗って焼いて食うのを蒲鉾と言う、元は穂に似ているので言ったが、今は誤って板に貼つたものを蒲鉾と言ひ、竹に貫いたのは竹輪と言う、とある。井原西鶴の『本朝校陰比事』（三・二）には「竹輪の蒲鉾」とある。

つまり、初めは蒲鉾というのは今の竹輪で、蒲鉾を板に付けるようになって、竹輪という語が生まれたのだ。



（二六六一七三）の末ころに出た『古今

料理集』（六）に、蒲鉾を箸で摘んで入れる「箸つみいれ」、庖丁で付けて箸で中ふくらに摘み切る「切りつみいれ」の他に、「細つみいれ」「花つみいれ」「大つみいれ」「小つみいれ」があり、別に貝杓子ですくって煮え立つた塩湯につみ入れて煮る「つみいれはんぺん」（「貝つみいれ」とも言う）も出てくる。最後のものが今のつみれに近いようだ。

似たようなものにツクネがある。こちらは手でこねて丸める意味の「つくねる」の名詞形だ。握り飯を言う「つくね飯」という語が正徳五年（一七一五）に出た小説『世間子息気質』（二・三）に見える。

〇ころ

関西で関東だきに入っている、鯨の皮から脂を抜いたものをコロと言う。牧村史陽『大阪ことば事典』に、「こ

ろいり（転熬）」の略で、「加熱して堅くなるまでアブラをぬく。…もとは鯨に限らず、こうしたものをすべてコロイリ（転熬）」といったのである。」とある。コロコロとかコロガスとかのコロなのだろう。

〇竹輪・蒲鉾

もう一つのおでんの主役にチクワがある。わたくしは幼少のころ、カマボコとチクワの違いが分からなかった、というより、高級な蒲鉾にはあまりお目に掛からなかったのだ。

蒲鉾とは、もともととは蒲（かま、がま）の緑褐色の蠟燭形の穂（花序）を言う。建治元年（一二七五）に経尊が書いた『名語記』に、「蒲ノ実ノ鉾ニ（似タル様ニ魚ノミ（身）ヲ木ニツケテ、蒲ノホコヲ模セル歟）」とある。魚肉を木に付けて蒲の穂のように作つたので蒲鉾と言うのだが、この形は今の竹輪に近い。室町時代の『太草家より相伝

新版 すらんぐ（卑語）

庶民の感性と知恵のコトバ

暉峻康隆著
四六判並製・定価一五七五円（税込）

「コトバのいわれ、聞かせやしよう」

日本人の日常にいつの間にか息づいてきた「すらんぐ（卑語）」。
その素姓や語源を探ると、人生の縮図、人々の息づかいが見えてくる。
文献渉猟はもとより、ネオン街から屋台までを練り歩いた
軽妙洒落な江戸文学研究者による一味違った日本語論。



〇くいのコトバの巻―生あれば食あり（西鶴）

おでん／はんぺん／がんとどき／しやり／「かっぱ」と「げそ」／さばをよむ…

〇水商売のコトバの巻

あばすれ／いとはん／おきやん／おちやつぱい／おてんば／おぼこ…

〇山のおんなコトバの巻

山の神／しょんべん／はすっぱ／らしやめん／へそくり／くのいち…

〇おとこコトバの巻―汝が性のつたなきを泣け（芭蕉）

助兵衛／あこぎ／いかものぐい／くだをまく／じょうご／ずぶるく／やじうま…

〇娯楽コトバの巻―世界の嘘かたまって、美遊となれり（西鶴）

市松模様／一目お／大立物／大話／岡目八目／おはこ／すてぜりふ…

〇やくざコトバの巻―知らざあ言って、聞かせやしよう（弁天小僧）

やくざ／ぐれん隊／あしを洗う／「いんちき」と「いかさま」／「一か八か」…

〇続やくざコトバの巻

すべた／きせる／さくら／三下／すけ／でんぼう／どさまわり／はったり…

〇あなたのコトバ・わたしのコトバ

あっかん／油を売る／いかればんち／いちころ／おしや／じゃんけん／ぽん…

解説／小林祥次郎

◆◆ Web ページのご案内 ◆◆ <http://www.bensey.co.jp/>

近刊を含む書籍の内容紹介から、新刊・既刊書籍のご購入、最新ニュース・書評掲載情報など。

◆◆ ご注文方法 ◆◆

- ① web ページによるご注文 <http://www.bensey.co.jp/howtobuy.html>
- ② 電話・FAX によるご注文 電話：03-5215-9021 FAX：03-5215-9025

◆◆ お支払い方法 ◆◆

銀行振込・郵便振替・代金引換*・クレジットカード**等がご利用いただけます。
(いずれの場合も、送料が別途 300 円かかります)

① 銀行振込の場合

三菱東京 UFJ 銀行麹町支店普通 3848245 ペンセイシュッパン (カ)

② 郵便振替の場合

00120-3-41856 勉誠出版株式会社

* 代金引換の場合、別途代引手数料として 315 円かかります。
(ご注文が 3,000 円未満の場合のみ)

** クレジットカードのご利用は、当社サイトからのご注文に限ります。

投稿募集

「勉誠通信」へのご寄稿を募集いたしております。
現在のご研究内容の紹介や、ご興味をもたれていることなど、ご自由にお書きいただければと存じます。

◆ お問い合わせおよび送付先: mnmtf@bensey.co.jp
メールアドレスに「勉誠通信用原稿」と明記してください。

編集後記

二月八日、立松和平先生が亡くなられました。
四年前にインタビュアでお会いして以来、『立松和平 日本を歩く(全七巻)』『日光』『立松和平書評集』『織田信長』『月光』と、たくさん本で一緒に過ごしていただきました。
また、昨年末には、これまでのお仕事集大成である『立松和平全小説』の刊行が始まったばかりでした。こんな時代に全三〇巻は、先生にとっても私たちにとても、大きな挑戦になるはずでした。その第一巻が出来上がった直後に、山下洋輔さんと対談した際のテーマが手元にあります。その最後に、こんな会話をかわしていました(「編集」が私です)。

山下 しかしすごいね、この全集は。ものすごい。全何巻？

立松 三〇巻ですよ。

山下 うわー、すごい。

立松 最後まで到達すればいいけどな(笑)

編集 到達はさせますよ、それは。

立松 してよね(笑)

編集 ええ。

立松 途中で終わりましたってのは切ないな。

立松先生、あまりにも切ないことになってしまいました。これから刊行される全集をご覧いただけないかと思うと、残念でなりません。

もう二度とお会いできないとは、信じられない気持ちがあります。
立松先生、心よりご冥福をお祈りいたします。(2/9 記)